

「正信偈」について（第六回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による
によらいしよいこうしゅつせ

如来所以興出世

如来、世に興出したまうゆえは、

ゆいせ みだ ほんがんかい

唯説弥陀本願海

ただ弥陀本願海を説かんと
なり。

ごじよくあくじ ぐんじょうかい

五濁悪時群生海

五濁悪時の群生海、

おうしんによらいによじつごん

みこと

應信如来如実言

如来如実の言を信ずべし。

〔意識〕

如来が世に出られたわけは、ただ、海のように広く深い阿弥陀仏の本願をお説きになるためである。

五濁の悪時に生きるすべての人びとは、釈迦如来の事実の通りのお言葉を信ずるべきである。

「如来」というのは、「如（真実）から来た人」という意味ですが、この場合は、釈迦牟尼如来、すなわちお釈迦様（釈尊）のことをいっておられます。

「世に興出したもうゆえ」というのは、「この世間にお出ましになられた理由」ということで、釈尊はどのような目的があったために、この世に生まれてこられたのか？ということなのです。

その理由は、「唯説弥陀本願海」すなわち「ただ弥陀本願海を説かんとなり」とのべられ、つまり、釈尊がこの世間にお生まれになって、仏に成られたのは、ただただ、私たちに、阿弥陀仏の本願のことを教えようとされたためであった、ということなのです。阿弥陀仏の本願とい

うのは、私たち一人ひとりを間違ひなく救おうとしてみてください、深く大きな願いのことです。そのような広大な願いが、私がこの世間に生まれてくる以前から、すでに私に差し向けられ、ただただ私のために用意されている。その事実を私に教えようとしてくださる為に、釈尊はこの世間にお出ましになられたのです。

釈尊は、「仏説阿弥陀経」の中で、この世間のことを五濁の悪世であると教えておられます。すなわち五つもの濁りがあるひどい世の中ということです。私たちが生きているこの世間は「五濁悪世」であり、私たちが生きているこの時代は「五濁悪時」なのです。

「五濁」というのは、末世において、人間が直面しなければならぬ五種類の濁り、汚れた状態けがをいいます。

先ず「劫濁」、「劫」は「時代」という意味ですから、「時代の汚れ」ということになります。疫病や飢饉、動乱、戦争が続発するなど時代そのものが汚れる状態なのです。

「見濁」の「見」は見解ということ、人々の考え方や思想をいいますが、「見濁」とは、邪悪で汚れた考え方や思想が常識となつてはびこる状態です。

「煩惱濁」は、煩惱による汚れということで、欲望や憎しみなど、煩惱によって起こされる悪徳が横行する状態です。

「衆生濁」は、衆生の汚れという事で、人々のあり方そのものが汚れることです。心身ともに、人々の資質が衰えた状態になることです。

「命濁」は、命の汚れということですが、それは自他の生命が軽んじられる状態です。また生きていくことの意義が見失われ、生きていくことのありがたさが実感できず、生涯が充実しない虚しいむなさまです。

このような五濁の悪時に生きる人々、つまり我々は、如来の事実の通りのお言葉、つまり釈尊が説かれた真実、阿弥陀仏の本願の教えを信ずるべきであると、親鸞聖人はおしえられたのです。